

# 人間関係と接続詞「だって」の使い方

萩原孝恵

## 要 旨

日本語母語話者は会話をする際、“人間関係という指標”によって接続詞を使い分けている。本稿では、話しことばで使用される接続詞「だって」を調査し、人間関係の中で「だって」がどう使い分けられているか、またどのような運用がなされているか、を考察した。調査した資料は、4つの人間関係（初対面同士、友人同士、親しい女性同士の友人、親しい男性同士の友人）の雑談資料で、調査の結果、「だって」は、人間関係が近づくほどその使用が増え、会話相手への心的依存度が高まること、また語用機能の拡張がみられることが示された。初対面同士で使用される「だって」の場合、自分の発言に対する理由説明や相手の発言に共感して理由説明をする使い方が多いのに対し、友人以上の関係になると、相手の発言・思考領域に踏み込むような使い方や、察しを求めるような使い方が観察され、「だって」の運用には“人間関係”が指標となっていることが明らかになった。

【キーワード】 人間関係、「だって」、意図、発話態度、解釈、語用機能

## 1. 問題の所在

日本語学習者が、日本語を適格に運用するためには、語の意味や文法を知っているだけでは不十分である。このことは、論理関係を示すはずの「接続詞」についても例外ではない。話しことばで使用する接続詞の場合、人間関係が重要な指針となると考えられる。たとえば、(1)の「だって」の使い方をみてみよう。

- (1) a. 【当該日が締切日である課題を提出できない理由を教師に尋ねられ】<sup>1)</sup>

学生A：だって、昨日は頭が痛かったんです。

- b. 【約束の時間に遅れた理由をあまり親しくない友人に尋ねられ】

学生B：だって、目覚ましがならなかったんだ。

(1a) (1b)の学生はいずれも学習者で、当該教師もしくは友人に、「だって」を使い理由説明をしている。この発話文は、適格文であり、かつ接続詞としての用法も間違っていない。しかし、日本語母語話者は、このような状況・関係性〔自分が学生で相手が教師である(1a)、自分が学生で相手があまり親しくない友人である(1b)〕の場合には、「だって」を使わないであろう。なぜなら、この状況で「だって」を使うということは、相手の怒りをかうか、なんと自分勝手な人なのかと相手に思われるであろうことを、母語話者であるなら、容易に想定することができるからである。宇佐美(2003)の「ディスコース・

ポライトネス理論 (DP 理論)」<sup>2)</sup> を援用して (1) のような「だって」の使い方を説明するならば、当該状況において「だって」を使うことは、円滑な人間関係を保つための手段として、つまり、対人コミュニケーションにおいて「マイナス・ポライトネス効果」いわゆる『不愉快』な効果」(p.127) を生んでしまう可能性を示唆する。

ところが、学習者のこのような発言は、「外国人だから仕方がない」と許されてしまうことも少なくない。その結果、この使い方はその後も用いられ、やがて定着することになる。しかし、もしも「だって」が導く発話態度・伝達される意図を学習者が認識していたとしたら、当該学習者は (1) の場面で「だって」を使用したであろうか。本稿は、従来の接続詞の研究で十分に言及されてこなかった話しことばの接続詞の運用ルールの具現化を目的とする。母語話者が無意識のうちに有している話しことばで使用する接続詞の運用ルールを、「だって」の使い方を通して分析し、その用法に一体何の関係しているのかを探る。

本論は、次節で、「だって」がいつ頃から使われ始め、どのような語かをまず記述する。3 節で、実際に母語話者が会話の中で「だって」をどのように使っているのかについて、計量的な手法で人間関係ごとに調査・分析する。4 節で、先行研究で分析されている「だって」の意味・用法を、会話の話し手・聞き手のそれぞれの視点から分析・考察する。5 節では、4 節で記した「だって」の特徴を踏まえ、母語話者同士の会話のやりとりの中で、「だって」が実際にどのように使われているのか、どのような意味を表しているのかについて、観察された全ての「だって」(計 216 例) を対象に分析・検討する。最後に、まとめと今後の課題について述べる。まずは、「だって」という語がいつごろから使われ始め、どのような語であるのかについて述べる。

## 2. 接続詞「だって」の成り立ち

青木 (1973) は、上代、中古、中世、近世、明治以降 (近代・現代) と時代を分け、文献・テキストから用例を採取することによって、接続詞および接続詞的語彙 (接続詞の語の認定にはさまざまな考え方があることから、青木はこう呼んでいる) の出現した時代<sup>3)</sup> を、一覧表にまとめている。青木 (1973) の調査では、「だって」の存在が認められたのは明治以降のことで、「だって」は新しい接続詞であるといえる。

「だって」は、田中 (1984) によれば、「だといって」に由来し、動詞の「言う」を核にして成立したものであると説明されている。三尾 (1958) は、「だ」に関し、佐久間鼎の「前文代理的な役割をする」という記述を引用し、「だって」を「前文代理の『だ』とむすんでできた接続詞」(p.185) と説明している。

また、「だって」を「辞からの転成」と捉えているのが森岡 (1973: 20) で、これは、時枝 (1950) の接続詞を「辞」とする捉え方に基づくものと考えられる。<sup>4)</sup> 時枝の「辞」の定義は、「言語主体の感情、情緒、意志、欲求等を表す」(p.63) と記述され、接続詞というのは、話し手が話し手の立場の表現で決めるものと捉えられている。時枝の接続詞に関する説明を、次の (2) の例で確認してみよう。

(2) それは読んだ。しかし、面白い本ではない。 (時枝 1950: 163)

時枝は、(2) を「文と文をつなげている」例として示している。この例で、「それは読

んだ。しかし、面白い本ではない」の間の二つの事実に関係を見出すのは、話し手の立場の相違によるものであるため、「話し手が面白いであろうと期待して読む場合とそうでない場合とでは、当然二つの事実の関係が異なるべきで、そのような立場の表現がこの『しかし』という語によって表現されている」(p.163)と説明されている。接続詞が話し手の立場の表現であるため、その立場により表現を変えたとする時枝のこの見解は示唆的である。また、前出の三尾(1958)の説明の「前文代理の『だ』」(p.185)という捉え方も、「だって」の照応先を検討する際に重要な視座となる。

以上、接続詞「だって」について概観したところで、3節では、母語話者が話しことばの中で「だって」をどのように使用しているのかについて、計量的な観点から客観的に捉えてみる。

### 3. 人間関係別「だって」の使い方<sup>5)</sup>

#### 3.1. 調査の概要

調査資料は、宇佐美(2005)の「BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1」の42の<雑談>ファイルで、人間関係ごとに分類された文字化資料である。各コーパスの名称は、「初対面と友人同士の女性の雑談」「親しい友人同士男女」で、前者のフォルダーには「初対面同士の11の雑談」と「友人同士の12の雑談」、後者のフォルダーには「親しい女性同士の友人の9の雑談」「親しい男性同士の友人の10の雑談」がそれぞれ収録されている。「友人同士」と「親しい友人同士」との人間関係の差異については、「親しい友人同士」の人間関係は「非常に親しい同性・同学年の大学(院)生」という記載がなされているが、それ以上の情報は示されていない。

本調査は、前出の「初対面同士」「友人同士」「親しい女性同士の友人」「親しい男性同士の友人」のそれぞれの人間関係で、接続詞が実際にどのように使われているのか、といった疑問について計量的に調査することにより、客観的な指標を得ることを目的とする。

先行研究において、話しことばの接続詞を量的側面から調査・分析しているものには、大石(1954/1971<sup>6)</sup>)、佐久間(1993)、三井(1999)、林(1999)がある。この中で、接続詞の使用率順語彙表を提示している佐久間、三井、林の調査結果<sup>7)</sup>は、萩原(2007)が今回集計した調査結果(表1~4)と類似した様相を示している。

表1 初対面同士の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	36.10%	36.10%	でも	252	252
2	2	22.78%	58.88%	で(一)	159	411
3	3	14.04%	72.92%	だから	98	509
4	4	12.89%	85.82%	じゃ(あ)	90	599
5	5	6.45%	92.26%	それで	45	644
6	6	1.72%	93.98%	しかも	12	656
7	7	1.29%	95.27%	だって	9	665

表2 友人同士の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	32.23%	32.23%	でも	302	302
2	2	22.95%	55.18%	で(一)	215	517
3	3	15.69%	70.86%	だから	147	664
4	4	6.30%	77.16%	だって	59	723
5	5	5.12%	82.28%	じゃ(あ)	48	771
6	6	3.74%	86.02%	それで	35	806
7	7	2.88%	88.90%	しかも	27	833

表3 親しい女性同士の友人の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	30.35%	30.35%	でも	248	248
2	2	24.60%	54.96%	で(一)	201	449
3	3	13.10%	68.05%	だから	107	556
4	4	7.96%	76.01%	だって	65	621
5	5	5.26%	81.27%	しかも	43	664
6	6	5.14%	86.41%	じゃ(あ)	42	706
7	7	4.41%	90.82%	それで	36	742

表4 親しい男性同士の友人の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	33.57%	33.57%	でも	283	283
2	2	16.01%	49.58%	で(一)	135	418
3	3	15.54%	65.12%	だから	131	549
4	4	9.85%	74.97%	だって	83	632
5	5	8.90%	83.87%	じゃ(あ)	75	707
6	6	5.22%	89.09%	それで	44	751
7	7	2.61%	91.70%	しかも	22	773

※表1～表4の全容については、付録資料として添付している。

このことから、本調査結果は、会話で使用される接続詞の具体的な資料として汎用性があるといえる。ここで、人間関係によって特徴的な使用傾向を示した「だって」の使用度数と使用率（表1～4の■の部分）に着目してみると、「だって」の使用には、人間関係によって差異があることが示唆されている。

### 3.2. 人間関係と「だって」の使用度数と使用率

会話（雑談）の際、母語話者はどのような接続詞を使って話をしているのであろうか。本項では、人間関係ごとに接続詞を集計した使用率順語彙表（表1～4）から、「だって」の用法を検討する。

表1～4の「だって」の使用度数と使用率から、その運用に“人間関係という指標”が何らかの形で関係しているのではないかと、という点が示唆される。具体的に「だって」の使用率を比較してみると、初対面同士が1.29%、友人同士が6.30%、親しい女性同士の友

人が 7.96%、親しい男性同士の友人が 9.85% (表 1~4 参照) と、人間関係が近くなればなるほど徐々にその使用率が上昇している。このことは、母語話者が「だって」を使う時には、①時と場を選んでいる、②人間関係が「だって」の使用をコントロールしている、証拠であり、前出 (1) でみた「だって」の使い方の何が問題であったのか、を説明するための手がかりを示唆している。

以上、3 節では計量調査の結果を基に、会話で観察される接続詞の使用実態を計量的に比較した。その結果、「だって」という接続詞の運用には“人間関係という指標”が関係していることが示唆された。4 節では、当該示唆を踏まえた上で、先行研究で記述・説明されている「だって」を整理し、当該記述・説明と使用実態とのズレを検討する。

## 4. 「だって」再考

### 4.1. 「だって」の意味と3つの説

「だって」は、一般的に、表 5 の i. <理由説明>の「だって」と、ii. <逆接>の「だって」という 2 つの意味があるといわれている。そして、iii. <中間的意味>は、蓮沼 (1995) によって示された新たな見解である<sup>8)</sup>。

表 5 「だって」の意味

分類	意 味
i	理由説明・・・「(だ) から」「なぜなら」「というのは」の意味
ii	逆接・・・「でも」「しかし」「けど」の意味
iii	中間的意味・・・i, ii 両方の意味を融合したような中間的な意味

iii の<中間的意味>の存在を指摘した蓮沼 (1995: 266) は、「だって」について「やや特異な性質を有している」と言及している。これは、先行研究における意味の解釈が、次の表 6 で示すように、統一した見解がないという理由にも繋がっているように思われる。現在のところ、「だって」の意味に関する捉え方は、大きく分けて 3 つの説がある。表 5 の i, ii, iii と併せ、表 6 をご覧いただきたい。

表 6 「だって」の意味に関する 3 つの説

説	「だって」の意味の捉え方	先行研究
a	i. <理由説明>、ii. <逆接> の 2 つの意味を持つ	・森田 (1980) ・横林・下村 (1988) ・メイナード (1992)
b	i. <理由説明>、 ii. <逆接> [& iii. <中間的意味>] の両方の意味を併せ持つ	・佐久間 (1991) <sup>9)</sup> ・高橋 (1994) ・蓮沼 (1995)
c <sup>10)</sup>	i. <理由説明> 基本的な意味は 1 つである	・沖 (1996, 1997, 2006)

表6のaは、i.<理由説明>、ii.<逆接>、の“2つの意味を持つ”という「だって」の捉え方である（森田，1980；横林・下村，1988；メイナード，1992）。bは、i.<理由説明>、ii.<逆接> [& iii.<中間的意味>] の“両方の意味を併せ持つ”という「だって」の捉え方である（佐久間，1991；高橋，1994；蓮沼，1995）。cは、基本的な意味は“i.<理由説明>だけである”という「だって」の捉え方である（沖，1996，1997，2006）。

次に、「だって」が使える場面、相手、そして「だって」によって表される発話態度に関する先行研究の記述・説明について整理する。

#### 4.2. 「だって」が使える会話の種類・会話の相手・発話態度

「だって」は、①どのような会話で、②どのような相手に対し使用できるのか、また、③どのような話し手の発話態度が表されるのか。先行研究における記述を表7に整理する。

表7 「だって」が使える会話、相手、表出する発話態度

① 会話の種類	② 会話の相手	③ 表出する発話態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>・うちとけた・くだけた会話で使用される（田中，1984；森田，1980；横林・下村，1988）。</li> <li>・成人の社交的な場面での使用は不適切である（蓮沼，1995）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族・親しい間柄で、目下か同等に使う（蓮沼，1995）。</li> <li>・気の張る相手や目上には使えない（森田，1980）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し手の子供じみた、甘えた態度を表出する（田中，1984；蓮沼，1995）。</li> <li>・会話中、話者の存在を強く感じさせる（メイナード，1992）。</li> <li>・発話意図をくんでくれるだろうという聞き手への甘えが表れる（メイナード，1992）。</li> </ul>

表7が示す「だって」の特徴は、なぜ初対面同士において「だって」の使用率が低いのか（表1参照）、といった疑問に対する重要な手がかりを示している。表7中、①の「うちとけた会話で」という記述は、初対面で最初からうちとけて話すことは難しいこと、②の「家族・親しい間柄で」という記述は、会話相手との関係性が使用上の指標になっていることを裏付けている。また、③の「話し手の子供じみた、甘えた態度」「話者の存在を強く感じさせる」「発話意図をくんでくれるだろうという聞き手への甘え」という発話態度の表出に関する記述は、一般的に、初対面の人間関係では現さない態度といえる。したがって、3.2 でみた人間関係が近づけば近づくほど「だって」の使用率が上昇したという調査結果は、言い換えれば、母語話者であれば、表3に記されている「だって」の特徴については無意識のうちに認識している—自然に身に付けている—ことを示している。

「だって」のように、コミュニケーションが行われる場や、話し手と聞き手の人間関係がどうであるかによって選択されるような表現を、井出（2006）は「プラグマティック・

モダリティ」(p.49)と呼んでいる<sup>11)</sup>。しかし、概して、このような表現は、「モダリティ」という術語が示す通り、話し手側からの視点で記述・説明されるため、それが実際の会話で聞き手にどう解釈されるか、といった語用上の意味・機能の可能性については触れられていない。まして、本来、論理関係を示すはずの接続詞の場合、“人間関係という指標”で語の運用ルールを説明しているものはほとんどない。しかし、会話という言語活動を考えてみると、当該会話には当然のことながら話し手と聞き手が存在し、話し手がどういう意図で発話をしたか・何を伝えようとしたかはもちろん、言語的にコード化された発話が聞き手にどう捉えられるか・どう解釈されるか、といった両方の視点からの記述・説明が必要だといえる。つまり、“話し手側の意図”と“聞き手側の解釈”の両方の意味・用法の記述があってこそ、語の的確な運用に結びつくということである。日本語学習者が、自分が話し手としてある語を選択して発話をした際に、聞き手がどう捉える可能性があるか、このことを知っているか否かで、前出(1)のような「だって」の使用は避けられる可能性がある。

多くの接続詞の研究は、いずれか一方の側から(ほとんどは話し手側・書き手側から)論じられてきた。それは、文章における接続詞の使用の場合には理に適っている。しかし、「だって」のような、話し手の発話態度が明示的に表出する類<sup>12)</sup>の、日常的な会話(雑談)で使用される接続詞については、話し手側の発話態度が、聞き手側にどう映るのかについても認識しておく必要がある。日本語を学習する上では、意味に加えて暗示的に伝達される話し手の意図・発話態度、それがどのような印象を与える語なのか、それを使うことによってどのように解釈される可能性があるのか、といった母語話者であるなら身に付けているであろう「だって」の運用上のルールを、学習者に知識として提示する必要がある。

次項では、聞き手側に伝達される話し手の意図・発話態度について、先行研究の分析を基に記述する。

#### 4.3. 聞き手に伝達される意図・態度

滝浦(2003)は、van Dijk(1981)の「意味論的使用(semantic use)／語用論的使用(pragmatic use)」(滝浦 2003: 35)といった概念を参照することにより、「だって」を考察している。<sup>13)</sup> 滝浦(2003)の用例をみてみよう。

(3) だって、だってなんだもん! (滝浦 2003: 38)

このような「だって」は、「だだをこねる子どもの『だって』に見ることができる」(p.38)と滝浦は前置きし、(3)の「だって」について次のように説明している。

この場合、「だって」の文は命題内容を欠いているが、それは、意味論的次元に自らの立場を支える根拠がないまま自己擁護を行おうとした行為そのものであり、あるいは、自己擁護の根拠を差し出しても相手はそれを受け入れないだろうという読み of 現われである。 (滝浦 2003: 38)

滝浦(2003)は、話し手側の視点から、話し手が根拠のない自己擁護をしている、あるいは自己擁護の根拠を言っても相手にはわかってもらえないと思っている、という話し手の

心的態度を説明している。

しかし、これは裏を返すと、聞き手側にどう伝わるか、どう思われるか、といった点についての示唆と捉えなおすことができる。つまり、「だって」を使うことによって、聞き手側に、“何等根拠もないのに自己擁護をしていると思われる可能性”や、“どうせわかってもらえないと思いながらも自己擁護をしていると勘ぐられる可能性”を示している。滝浦の例をさらにみてみよう。

(4) A: だって、とにかく急いでいたから。

(滝浦 2003: 33)

B: 「だって」とは、何だ!

(滝浦 2003: 35)

このような「だって」について滝浦 (2003) は、(4) Aのような「だって」は『『だって』と言った事実そのものに向けられる叱責がしばしばあり得る』(p. 35) と説明し、「言い訳臭い」(p.35) と言及している。

この滝浦の記述を聞き手側の視点から捉えなおすと、(4) Aの「だって」の使用は、聞き手に「言い訳」として解釈される可能性が高いことが示される。つまり、「だって、とにかく急いでいたから」の「だって」が、＜理由＞の意味で使用されているとしても、聞き手に伝わる意味や解釈される意味は、決して望ましいものとは言えないことを、滝浦の話し手側からの説明は示唆している。

さらに、(4) の会話の場合、Aの「だって、とにかく急いでいたから」が、Bに＜自己正当化＞による“反発”の発話行為をしようとしていると解釈され、Bの叱責を誘う、という滝浦の説明も、日本語学習者が「だって」を使用する場合に認識しておかなければいけない点である。滝浦は「だって」について、「自分の正当性を相手に“伝えたい”と欲するから言うのではないだろうか」(p.38) と見解を述べている。このことから、「だって」を＜理由説明＞の意味で使用すると、“自分の正当性を伝えたい”という意図が、相手に否応なく伝達されるということを、日本語教育の現場で学習者に提示しておく必要がある。

次に、“話し手側”の観点から、「だって」によってどのような意図及び発話態度が表出されるかをみてみよう。

#### 4. 4. 表出する話し手の意図・態度

「だって」は、「自分の正当性を相手に“伝えたい”と欲するから言う」と、滝浦 (2003: 38) が述べているように、「だって」による＜自己正当化＞の投影は、メイナード (1992) の指摘以来、蓮沼 (1995)、沖 (1997)、滝浦 (2003) と共通した見解となっている。そして、この＜自己正当化＞という態度に、新たな用法が出てきたと述べているのが、沖 (1997) である。

沖は、新たな用法は＜自己正当化＞ではなく、「相手の身になって考えるというルールが加わった」「共感談話」「気配り談話」(沖 1997: 121) であると説明し、当該用法が大学生世代に観察されることを指摘している。この用法は、相手の立場に立って、共感や同調を示し、いわゆる＜相手の立場に立った正当化＞の用法である。本稿では沖に倣い、従来の用法を“旧用法”、新たな用法を“新用法”と呼び、それぞれの用法をみてみる。(5) は



“旧用法”の例で、(6)は“新用法”の例である。

(5) “旧用法”

A：一緒に行こうよ。

B：(行かないよ。) だって、忙しいんだもん。

(沖 1997: 120)

(6) “新用法”

A：ごめん。遅れちゃった。

B：(いいよ。) だって、今日学校あったもんね。

(沖 1997: 120)

沖(1997)は、(5)の“旧用法”と(6)の“新用法”の差異を「対立的」・「親和的」という表現で、それぞれの状況を形容している。また、括弧内は、沖による復元箇所で、旧用法では、＜勧誘＞に対して＜断り＞を述べ、相手の意図に反する態度を示すものであったが、新用法では、「いいよ」「しょうがないよ。いいよ。」というニュアンスを表し、「相手の側Aの事情を考慮・推測した理由述べ」(p.120)になっていると説明している。

また、「だって」の論理関係の記述を試みたのが蓮沼(1995)で、蓮沼は、シナリオで使用されていた「だって」の会話を採取し、「だって」の論理的な関係がどのようになっているのかを分析している。蓮沼の分析では、「だって」の用法には、①抗弁型：聞き手からの挑戦に対抗する時、②挑戦型：話し手から聞き手に挑戦する時(発話の冒頭で使用される)、③補足型：対立が顕在しない文脈における話し手自身の立場の正当化をする時(主に独話型の談話で使用される)、④折衷型：聞き手との間に対立要素はあるものの、聞き手の立場を支持するような時、と4つの用法があり、この中で、最も高い使用率であったものは①の抗弁型であった、と報告している。この蓮沼の調査結果については、作られた会話(蓮沼が利用したシナリオ)と、実際の会話(本調査で利用する雑談コーパス)との「だって」の使われ方・現れ方に差異がある可能性があるので、5節で改めて検討する。

以上、聞き手側の視点から、「だって」を伴う発話が、どのように解釈されるのか、また、話し手側の視点から、「だって」を伴うことにより、どのような意図・態度が表出されるのかについて、先行研究の記述・説明を基に再考した。そして、話し手の意図・態度は、裏返すと聞き手側に伝達・解釈される可能性のある話し手の発話態度であることを指摘した。

5節では、先行研究で記述されてきた「だって」の特徴が、実際の運用の説明に適用可能なかを検証する。

## 5. 216例の「だって」が示唆する運用ルールと人間関係

本節では、3節の調査で抽出した「だって」が、人間関係ごとにどのように使われているのかを分析し、人間関係と「だって」の使い方に違いが観られるのか、その運用ルールを考察する。最初に、初対面同士の会話で使用された「だって」からみてみよう。

### 5.1. 初対面同士で使用された「だって」の特徴

初対面同士の会話で使用された「だって」は全部で9例であった。そのうち、最も多か

った使い方は(7)のような“自分の発言を補足する使い方”で、この使用が全体の6割を超えていた。また、(8)のような“相手の発言に共感し、自らの考えている理由を補足する使い方”も2例観察された。その他、(9)に示す沖(1997)が指摘している“新用法”的な「だって」の使い方も1例観察された。沖は、冒頭に現れる「だって」のみを分析対象としていたが、実際には、冒頭以外にも<親和的>な「だって」の使用は観察された。

(7) 自分の発言を受け理由説明をする「だって」

A: や、でも、だからと言って(<笑い>)、英語も話せないけど、「言語名 2」なんてもっと話せないから<2人笑い>。

だって一、1、2年ですごい徹底的に文法とかやるじゃくないですか><(>。

B: <うんうん><(>うん。 (宇佐美, 2005: 初対面 20\_)<sup>14)</sup>

(8) 相手の発言に共感し、理由説明をする「だって」

A1: <なんかねー、やっぱり><(>)、病院だけはなんか、日本のほうが(うん)いいな、みたいなふうに。

B: そう、だって今韓国でさえ、なんか、韓国の薬も強いから、あんま、あの、日本で、日本の風邪薬持ってったほうがいいとか<そう…><(>。

A2: <そう><(>)なんですか。 (宇佐美, 2005: 初対面 25\_)

(9) 自分の発言に対する補足+相手に共感・同調の意を示す「だって」

A1: うん、それなりに仲良くなるんですけど、根本的な部分でやっぱり(ああ)分かり合えないみたいな。

B1: ああ。

本当に家族じゃないからね<2人で笑い>。

A2: ですよね。

B2: だって、ねえ。

/少し間/なんか、やっぱり「大学名略称」の人って色々やってるよね、ほんと。 (宇佐美, 2005: 初対面 30\_)

初対面同士の「だって」の使われ方をまとめると、相手に対する反対を示すような「だって」は1つもなく、相手の発言に対し、お互いにその領域を侵さない形で、会話のやりとりが進行していた。「だって」が使われた発話は、自分の発言に対する<理由説明>で使用され、相手の発言に対する<理由説明>での使われ方は少なかった。

次に、友人同士で観察された「だって」について考察する。

5.2. 友人同士で使用された「だって」の特徴

友人同士の会話で使用された「だって」は、全部で59例であった。初対面同士で観察された「だって」との用法上の差異は、友人以上の関係になると、共感・同調を示すもの他に、相手に共感・同調を求める、すなわち<察しを求める>(10)のような使われ方

が観察されたことである。

(10) 相手に共感・同調を求める<察しを求める>「だって」

A1: そっか、砂糖と塩入れ間違えちゃいかんよー。

B1: <うーん>{<}>。

A2: <あーそっか>{>} そうなんだ=。

B2: = “絶対、しょっぱいはずはない” って言ってた。

A3: あー。

B3: うーん。

A4: もう、<だってさ>{<}> II。

B4: II< “言えよ”{>} よかったのに” <ってー>{<}>。 (宇佐美, 2005: 友人 38\_)

全体的な傾向を初対面同士の会話の場合と比較してみると、初対面同士では、「だって」は自分の発言を受ける「だって」の用法が圧倒的に多かったのに対し、友人同士では、相手の発言を受けて「だって」が使われるケースが増加したことが特徴である。友人同士の場合、自分の発言を受ける「だって」と相手の発言を受ける「だって」の割合は、ほぼ同じ割合（いずれも 4 割台）で使用されていた。また、蓮沼（1995）の指摘する<中間的な意味>での使用、いわゆる多義的な意味を表す（11）のような「だって」の用法も観察された。

(11) <理由説明><逆接>両方の意味を含みこんだ中間的な意味を表す「だって」

A1: あたしもう、ビデオ渡されて、“はい翻訳して” って言われて終わりだから、一日中こう II。

B: II だって、“疲れたら廊下うろついていいから”、とか言われてるでしょ。

A2: うん、でもうろついて何もないから<つまらない>{<}>。

(宇佐美, 2005: 友人 33\_)

友人同士の会話で使用される「だって」は、自分の発言だけでなく、相手の発言に対して<理由説明>を行う用法が増えるとともに、相手に<察しを求める>ような語用機能を有す「だって」の用法が観察され始めることが特徴である。（10）に示したような“相手に共感・同調を求める”、いわゆる<察しを求める>「だって」の用法は、先行研究では記述されていない。しかし、実際の会話では、“共感・同調を示す”（沖, 1997）、いわゆる<察する>だけでなく、相手に<察しを求める>用法が、人間関係が近づくにつれ観察された。

次に、親しい女性同士の友人で観察された「だって」についてその特徴をみてみよう。

### 5.3. 親しい女性同士の友人で使用された「だって」の特徴

親しい女性同士の友人間の会話で使用された「だって」は、全部で 65 例であった。使用傾向としては、初対面同士の使用で多かった“自分の発言に対する「だって」の用法”

が減少し、反対に、“相手の発言に対する「だって」の用法”が増加したことが特徴である。また、友人同士で観察され始めた<察しを求める>「だって」の用法では、親しい女性同士の友人の会話で、さらに語用機能を拡張した(12)のような用法が出現し、その機能は、相手に<察しを求める>「わかってよ」という意図・態度を示すと同時に、相手と共同で一つの会話を成立させていく<sup>15)</sup>ためのマーカーとしても機能していることが示され、「だって」の多様な機能を浮き彫りにした。この(12)のような「だって」は、人間関係が近ければ使用が許される用法として、その特徴を記述することができる。

(12) <察し>+相手との共同会話を求める一種のマーカーの「だって」

A: さてさて(うん)、どうしようか。

だけ、選択肢も何もないよね。

<だってさー>{<}&#92;。

B: <選択>{>}肢。

(宇佐美, 2005: 親しい女 17)

以上の結果をまとめると、親しい友人同士の会話で使用される「だって」の傾向として、相手に共感・同調を求める「だって」の使われ方に加え、当該やりとりの中で二人で一つの会話を形作っていくような型式が生まれ、<察しを求める>場合にも単なる「わかってよ」というサインではなく、「だって」に続く発言を相手にフォローしてもらう、といった新たな「だって」の使われ方が観察されたことが特徴である。(12)のような「だって」は、会話上のマーカーとして当該やりとりにオンラインで作用していると判断できる。

最後に、「だって」の使用が最も多かった親しい男性同士の会話をみてみよう。

5. 4. 親しい男性同士の友人で使用された「だって」の特徴

親しい男性同士の友人の会話は「だって」の使用が最も多く、合計 83 例の使用が観察された。その運用上の特徴は、相手の発言に対する「だって」の使われ方が 7 割近くを占めていたことである。また、(13)で示すような、相手の発言に対して反対の意を示す<逆説>の意味での使い方も、親しい男性同士の友人のやりとりでは多かった。相手の発言に対し反対の意を示す<逆説>の意味での使い方と、前出(11)にみられるように<理由説明>が共存する中間的な意味での使用が全体の使用の約 5 割を占めていたことも、この人間関係の特徴として指摘できる。

(13) 相手の発言に対して反対の意を示す<逆説>の「だって」

A1: いや、ちゅーか、おれ別に(うん)ねー、普段思ってること結構言ってるからなー。

B1: あ、言ってるねー、別にねー。

A2: ねー。

B2: うん。

A3: 嫌なときは嫌だって言ってるでしょ。

B3: うん、言ってるねー<2人で笑い>。

それはねー、あの、大人としてはねー、隠すべきだねく2人で大きな笑い。

A4: ちゃう、だって<軽い笑い>もう(うん)、ほんとに嫌なときはやだっていう。  
=ちゃう、き、他の人には言わないよ。[↑]

B4: うん。

A5: 他の人(うん)にはー(うん)、ん、も、嫌でもー(うん)、“あーあー、ん、も、  
いいよ(うん)、いいよ”とか(うん)いって言うけど。

B5: うん。

親しい男性同士の友人の会話で使用された「だって」の傾向は、本調査対象とした他の人間関係に比べ、相手の発言に対し言及する「だって」や、相手の発言に反対の意を示す<逆接>の「だって」の使用が多いことが特徴的であった。これは、人間関係と「だって」の運用に関係があるという結果であり、心的距離が近い場合には、相手の発言領域・思考領域に踏み込める(相手の発言に言及するために「だって」を使ったり、相手の発言に反対の意を示すために「だって」を使う)が、心的距離が遠くない場合には、「だって」の使用は自分の発言領域に限られることを明らかにしたといえる。

実際に、人間関係ごとに、話しことばで観察された「だって」の使われ方を考察した結果、先行研究では多いとされてきた<逆接>の用法が、実はそれほど多くないことがわかった。すなわち、“抗弁型”の「だって」を使用する用法は、実際には多くないということである。蓮沼(1995)のシナリオをデータとした調査では、抗弁型、いわゆる<逆接>の意味での使い方が最も多かった、という分析結果が報告されていたが、今回の調査結果(実際の会話)では、<逆接>の意味で「だって」が使われることはそれほど多くなく、逆に、共感や同調を求める「だって」や、察しを求める「だって」の用法が少なくないことが明らかになった。確かに、親しい男性同士の友人の会話では、自分の考えや意見の表明・反論等、話し手の発話態度を表す用法が他の人間関係のグループに比べ目立ったが、それ以外の関係では、いずれもあまり観察されなかった。

人間関係と「だって」の運用ルールとの関係をまとめると、初対面同士で使用される「だって」と、人間関係が近くなっていく関係の中で使用される「だって」にはその運用に違いがあり、人間関係が近づくほど「だって」の語用機能が拡張することが明らかになった。そして、「だって」を使う場合、“人間関係という指標”によってその用法を使い分けることが運用上必要であり、自分の発言領域に照応させるために「だって」を使用するのか、それとも、相手の発言・思考領域に照応させるために「だって」を使用するのかは、会話相手との“人間関係という指標”で判断することが、「だって」の運用に求められていることがわかった。

## 6. まとめと今後の課題

「だって」は、もともと「だ」という前文代理と「言う」という動詞が組み合わさってできたもので、論理的には「だ」で前文を受け接続機能を果たす語であるが、話しことばで使用される場合には、「だ」が<自分の発言>を照応するだけでなく、<相手の発言>に対しても照応することが明らかになった。また、語用機能として、<相手に察しを示す>機

能から、＜察しを求める＞機能、＜察しから共同会話を求める＞機能へと、人間関係が近づくにつれ、その語用機能が拡張していくことも明らかになった。人間関係ごとに分析した「だって」の運用上の特徴と傾向は、初対面同士で「だって」を使用する場合と、人間関係が近い者同士が使用する場合とでは異なる使われ方をしていることが示された。また、蓮沼（1995）によるシナリオの調査で、＜逆接＞の用法が多く使用されていたという結果は、実際の会話では適用されないことも明らかになった。

今後の課題としては、発話態度が明示されるその他の接続詞の運用上の特徴を分析し、日本語母語話者が有している接続詞の運用ルールを具現化していきたい。

## 注

- 1) 【 】は当該会話が行われている状況を表す。
- 2) 「DP 理論は、B & L の理論においては付随的にしか扱われてこなかった『談話レベルの要素』や『周辺言語』にまで扱う対象範囲を広げ、言語表現だけではなく、『発話効果』という観点をも考慮に入れることによって、B & L の理論よりも、さらに『相互作用』という観点に重きをおいた『対人コミュニケーション理論』へと発展させようとしたものである。DP 理論では、待遇表現という言葉に反映されているような相手を一方的に『待遇する』という発想ではなく、また、B & L の理論におけるような『話し手の FT 度の見積もり』という『一方向的』な観点からだけでなく、常に、話し手と聞き手の相互作用としてのコミュニケーションという発想で言語行動を捉える。『待遇表現の使用』も、『双方向的』な『相互作用』や『交渉』のための、或いは、円滑な人間関係を保つための『対人コミュニケーションの一手段』に成り得るものとして捉える。」(宇佐美 2003: 123-124)
- 3) 青木（1973: 210）は、「ある時代に初出扱いされている語は、その時代から一応その存在が認められるということの意味しているのであって、前代に無かったことを積極的に意味するものではない」と注を入れている。
- 4) 時枝（1950: 63）の「詞」と「辞」に関する考え方は、①本居宣長の「詞」が「布」で「辞」が「それを縫う技術」のような関係にあるという考え方、②宣長の門人であった鈴木朧が「詞はてにをはならでは働かず、てにをはは詞ならではつく所なし」という考え方を発展させたものであると、時枝（1950）の著の中に記されている。
- 5) 第3節は、筆者が2007年8月19日「第6回 OPI 国際シンポジウム」で口頭発表した内容に基づいている。
- 6) 大石（1971）『話しことば論』（pp.322-333）は、大石（1954）の再掲である。
- 7) 本調査結果との比較は、佐久間（1993: 36）、三井（1999: 156）、林（1999: 358）をそれぞれ参照していただきたい。
- 8) 蓮沼（1995）は「折衷型」と称している。
- 9) 文脈展開機能として「だって」を分析している佐久間（1991）は、意味の観点から「だって」をみているわけではないので、意味に関する記述は特にない。しかし、用例の「だって」の説明の中で、「単に理由を述べるだけではなく、相手の不合理な質問に対

して抗議をしている」(p.18)という記述が存在することから、佐久間が、1つの「だって」に対し、2つの意味を併せ持つと捉えていることが明らかなため、本研究では、佐久間(1991)を[説Ⅱ]と分類した。

- 10) 田中(1984)は「承前の接続」[「前件を導いてきて、後件に結び付ける接続」(p.89)]という機能としては「だって」を「でも」と同じカテゴリーにしているが、意味については「なぜなら」と並列させ説明しているため、沖とは異なる視座と捉え、説cには掲載していない。
- 11) メイナード(1992:180)は「だって」を「談話のモダリティ標識(Discourse Modality Indicator)」と称している。
- 12) 「だって」と類似した特徴を示すものに「だから」が挙げられる。萩原(2006)は、「だから」も、自動的に話し手／書き手の態度が表出し、それが聞き手／読み手に伝達・解釈される接続詞であることから、双方向から観ていくことが必要であることを主張している。
- 13) 本稿では、van Dijk(1979)を参照した。
- 14) “20\_”等の表示は、宇佐美(2005)の資料に記されている識別番号である。
- 15) 水谷(1984)は「共話」と呼んでいる。

## 調査資料

宇佐美まゆみ監修(2005)「BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1」東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプロジェクト『言語運用を基盤とする言語情報学拠点』

## 参考文献

- 青木怜子(1973)「接続詞および接続詞的語彙一覧」鈴木一彦、林巨樹(編)『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』p.210-253. 東京: 明治書院.
- 井出祥子(1998)「文化とコミュニケーション行動—日本語はいかに日本文化とかがかわるか—」『日本語学』第17巻第9号, pp.62-77. 東京: 明治書院.
- 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』東京: 大修館書店.
- 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』東京: 大修館書店.
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『國語學』第54巻第3号, 117-132. 国語学会.
- 大石初太郎(1954)「日常談話の接続詞」『言語生活』9, pp.37-42. 東京: 筑摩書房.
- 大石初太郎(1971)「日常談話の接続詞」『話しことば論』pp.322-333. 東京: 秀英社.
- 沖 裕子(1996)「対話型接続詞における省略の機構と逆接—『だって』と『なぜなら』『でも』—」中條修(編)『論集 言葉と教育』pp.97-111. 大阪: 和泉書院.
- 沖 裕子(1997)「新用法からみた対話型接続詞『だって』の性格」『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第31号, pp.119-127. 信州大学人文学部.
- 沖 裕子(2006)『日本語談話論』大阪: 和泉書房.
- 佐久間まゆみ(1991)「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学部紀要』41, pp.9-22.

日本女子大学文学部.

佐久間まゆみ、鈴木香子 (1993) 「女子学生の日常談話の接続表現」『國文目白』第 32 号, pp.31-48. 日本女子大学国語国文学会.

高橋太郎 (1994) 「会話の展開のなかでの接続詞」『立正大学文学部論叢』第 99 号, pp.1-19. 立正大学文学部.

滝浦真人 (2003) 「『だって』の語用論—演算子が演算するもの—」『月刊言語』第 32 巻第 3 号, pp.33-39. 東京: 大修館書店.

田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」仁田義雄、益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 pp.211-233. 東京: くろしお出版.

田窪行則 (1990) 「対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性—」『アジアの諸言語と一般言語学』 pp.837-845. 東京: 三省堂.

田中章夫 (1984) 「4 接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦、林巨樹 (編) 『研究資料日本文法 ④修飾句・独立句編』 pp.81-123. 東京: 明治書院.

時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』東京: 岩波書店.

萩原孝恵 (2006) 「『だから』と『それで』と『そこで』の使い分け」『群馬大学留学生センター論集』第 6 号, pp.1-11. 群馬大学留学生センター.

萩原孝恵 (2007) 「〈雑談〉という活動の型で使われる接続詞—初対面・友人・親しい友人の雑談の比較から—」『第 6 回 OPI 国際シンポジウム予稿集』 pp.139-144.

蓮沼昭子 (1995) 「談話接続語『だって』について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第 8 号, pp.265-281. 姫路獨協大学外国語学部.

三尾 砂 (1958) 『話しことばの文法』東京: 法政大学出版局.

水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」金田一春彦古稀記念論文集編集委員会 (編) 『金田一春彦博士古稀記念論文集 第二巻言語学編』 pp.261-279. 東京: 三省堂.

三井昭子 (1999) 「第 7 章 話しことばの『だから』『それで』」現代日本語研究会 (編) 『女性のことば・職場編』 pp.155-173. 東京: ひつじ書房.

メイナード, S. K. (1992) 『会話分析』東京: くろしお出版.

森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」鈴木一彦、林巨樹 (編) 『品詞別日本文法 講座 6 接続詞・感動詞』 p.8-44. 東京: 明治書院.

森田良行 (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い分け—』東京: 角川書店.

横林宙世・下村彰子 (1988) 『接続の表現 (外国人のための日本語例文・問題シリーズ 6)』東京: 荒竹出版.

林 淑璋 (1999) 「会話分析と談話標識—『で』『だから』を手がかりに—」『言語情報科学研究』第 4 号, pp.335-358. 東京大学言語情報科学研究会.

van Dijk, T. A. (1979) Pragmatic Connectives. *Journal of Pragmatics* 3, pp.447-456.



# 付録資料

表1 初対面同士の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	36.10%	36.10%	でも	252	252
2	2	22.78%	58.88%	で(一)	159	411
3	3	14.04%	72.92%	だから	98	509
4	4	12.89%	85.82%	じゃ(あ)	90	599
5	5	6.45%	92.26%	それで	45	644
6	6	1.72%	93.98%	しかも	12	656
7	7	1.29%	95.27%	だって	9	665
8	8	1.00%	96.28%	あと	7	672
9	9	0.86%	97.13%	たとえば	6	678
10	10	0.57%	97.71%	(だ)けど	4	682
11	11	0.43%	98.14%	そういえば	3	685
12	12	0.29%	98.42%	あとは	2	687
13	12	0.29%	98.71%	(それ)だったら	2	689
14	12	0.29%	99.00%	また	2	691
15	12	0.29%	99.28%	それから	2	693
16	16	0.14%	99.43%	または	1	694
17	16	0.14%	99.57%	それも	1	695
18	16	0.14%	99.71%	それが	1	696
19	16	0.14%	99.85%	それと	1	697
20	16	0.14%	100.00%	なので	1	698

表2 友人同士の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	32.23%	32.23%	でも	302	302
2	2	22.95%	55.18%	で(一)	215	517
3	3	15.69%	70.86%	だから	147	664
4	4	6.30%	77.16%	だって	59	723
5	5	5.12%	82.28%	じゃ(あ)	48	771
6	6	3.74%	86.02%	それで	35	806
7	7	2.88%	88.90%	しかも	27	833
8	8	2.03%	90.93%	(だ)けど	19	852
9	9	1.92%	92.85%	あと	18	870
10	10	1.49%	94.34%	たとえば	14	884
11	11	0.96%	95.30%	(それ)だったら	9	893
12	12	0.85%	96.16%	そうすると	8	901
13	12	0.85%	97.01%	そしたら	8	909
14	14	0.75%	97.76%	あとは	7	916
15	14	0.75%	98.51%	また	7	923
16	16	0.32%	98.83%	それから	3	926
17	16	0.21%	99.04%	さて	2	928
18	17	0.21%	99.25%	そして	2	930
19	17	0.21%	99.47%	それも	2	932
20	17	0.11%	99.57%	しかし	1	933
21	20	0.11%	99.68%	それとか	1	934
22	20	0.11%	99.79%	それなら	1	935
23	20	0.11%	99.89%	それに	1	936
24	20	0.11%	100.00%	それよりも	1	937

表3 親しい女性同士の友人の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	30.35%	30.35%	でも	248	248
2	2	24.60%	54.96%	で(一)	201	449
3	3	13.10%	68.05%	だから	107	556
4	4	7.98%	76.01%	だって	65	621
5	5	5.26%	81.27%	しかも	43	664
6	6	5.14%	86.41%	じゃ(あ)	42	706
7	7	4.41%	90.82%	それで	36	742
8	8	2.82%	93.64%	そしたら	23	765
9	9	2.45%	96.08%	(だ)けど	20	785
10	10	0.86%	96.94%	あと	7	792
11	11	0.49%	97.43%	また	4	796
12	12	0.37%	97.80%	そして	3	799
13	12	0.37%	98.16%	それも	3	802
14	12	0.37%	98.53%	例えば	3	805
15	15	0.24%	98.78%	それに	2	807
16	15	0.24%	99.02%	そういえば	2	809
17	15	0.24%	99.27%	だったら	2	811
18	18	0.12%	99.39%	あとは	1	812
19	18	0.12%	99.51%	それとも	1	813
20	18	0.12%	99.63%	それが	1	814
21	18	0.12%	99.76%	それなら	1	815
22	18	0.12%	99.88%	しかし	1	816
23	18	0.12%	100.00%	それなのに	1	817

表4 親しい男性同士の友人の雑談における使用率順語彙表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	33.57%	33.57%	でも	283	283
2	2	16.01%	49.58%	で(一)	135	418
3	3	15.54%	65.12%	だから	131	549
4	4	9.85%	74.97%	だって	83	632
5	5	8.90%	83.87%	じゃ(あ)	75	707
6	6	5.22%	89.09%	それで	44	751
7	7	2.61%	91.70%	しかも	22	773
8	8	1.54%	93.24%	あと	13	786
9	9	1.42%	94.66%	(だ)けど	12	798
10	10	1.07%	95.73%	例えば	9	807
11	11	0.83%	96.56%	そしたら	7	814
12	11	0.83%	97.39%	そういえば	7	821
13	13	0.59%	97.98%	また	5	826
14	14	0.24%	98.22%	あとは	2	828
15	14	0.24%	98.46%	そして	2	830
16	14	0.24%	98.69%	それに	2	832
17	14	0.24%	98.93%	だったら	2	834
18	14	0.24%	99.17%	しかし	2	836
19	14	0.24%	99.41%	それでも	2	838
20	20	0.12%	99.52%	それとも	1	839
21	20	0.12%	99.64%	それから	1	840
22	20	0.12%	99.76%	そんなとき	1	841
23	20	0.12%	99.88%	そうすと	1	842
24	20	0.12%	100.00%	そりゃ	1	843